

## その思いを受け継いで

ぼくには、小さいころからぼくをうーんとかわいがってくれたじいちゃんがいる。でも、そのじいちゃんが、あと三か月で死ぬかもしれないなんて……。

今日、学校から帰って来ると、お母さんが深刻な顔をして言った。

「話があるの……。」

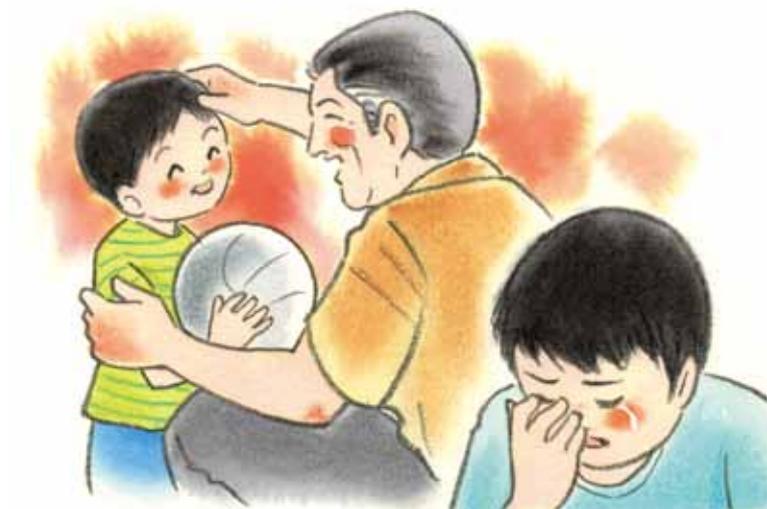
ぼくは、この前のテストのことでしかられるのかとちよつとかまえた。お母さんの口調は静かだった。

「ねえ、大地……。この前じいちゃんが入院したとき、お母さんは、

長生きするように色々とみてもらっているのよって言ったわね。

でもね、本当は……。じいちゃんは重い病気であと三か月の命と言われて……。大地にはずつと言わないでおこうと思っていたん

だけど、やっぱりきちんと話して、じいちゃんとの残された時間を大事にしてほしいと思ったの。」



「えっ、あと三か月の命ってどういうこと？」

ぼくは頭が混乱こんらんしてわけもなくトイレに閉じこもり、こみあげる悲しさに声をあげて泣いた。目を真っ赤にはらしてやっと出てきたぼくを見て、お母さんが言った。

「お母さんだってずうっと、もっともっとじいちゃんと一緒にいっしょにいたいわ。でも、命には、いつか終わりが来るのよ。」

「じいちゃんは、病気のこと知ってるの？」

「ううん。お母さんには言えない。悲しむ顔を見るのはつらいし、それより一日でも多くじいちゃんとの限かぎられた時間を大切に楽しく過すごしたいわ。だから、このままそつとしておこうと思うの。」

「うん……。」

次の日から、ぼくは、放課後にみんなと遊ぶのを止めて、学校から帰るとお母さんが用意したぼくの弁当べんとうを持って自転車で病院にお見舞みまいに行った。



「じいちゃん。一緒に食べよう。」「うん。大ちゃんと食べるとご飯は特別においしいからなあ。」「いっぱい食べて早く元気になってよ。」「うん。また一緒に温泉に行こう。」「ぼくとじいちゃんは学校の話や小さいころの思い出話をしながら楽しく夕飯を食べた。自分で言うのも何だけど、ぼくは感心にも毎日欠かさず病院に行った。じいちゃんは、ぼくが来るのをいつも楽しみにしていて、病院の売店でぼくの好きなおかしを買ってはいつもまくらもとに置いてくれていた。

でも、日に日にじいちゃんはやせていった。一か月もたつと痛みのために強い薬を使うようになって、意識がもうろうとするときがあった。そんなときは、食事どころか話もできなくて、ぼくは静かにベッドのそばのいすにすわって、目を閉じているじいちゃんの顔を見て話した。

「じいちゃん、元気出してね。注射は痛いけどよくなるためだよ。がんばらないとだめだよ。早くよくなつて一緒に温泉に行こうね。」

そんな日の帰り道は、うんとペダルが重かった。もう、このままじいちゃんと話せなくなるのかと思うと、悲しくて力一杯自転車をこいだ。

お母さんに言われてから約三か月が経った。じいちゃんの食事は点てきに代わった。もう二人で一緒に夕飯を食べることはできなくなった。でも、ぼくは（今日は、話せるかな。）と、小さな期待を

胸むねに大好きなじいちゃんに毎日会いに行っただ。

そんなある日、学校から帰るとお母さんがいなかった。玄関げんかんに紙がはってあった。(お帰り。病院にいます。) 言い知れぬ不安がぼくをおそった。ぼくは、無我夢中むがむちゆうで家を飛び出した。

ハアハア、「じいちゃん。」その後の言葉が続かなかった。

じいちゃんは酸素さんそマスクを付けられて、ピツ、ピツという機械の音だけが病室にひびいていた。瞬時しんじに、ぼくは色々なことを察した。

ぼくは、目を閉じて静かに横たわっているじいちゃんの手をにぎった。小さいころから何千回もつないでもらったじいちゃんの手だった。「ハア、ハア。」静かな病室には、じいちゃんの息づかいだけがあつた。ぼくはじいちゃんの耳元で言った。

「じいちゃん。きっと元気になるよ。もう少ししたらきっとよくなるよ。そしたら、じいちゃんの大好きな



温泉にまた一緒に行こうね。ぼくが連れて行ってあげるよ。だから、じいちゃん。元気出してよ。がんばるんだよ。」

そのときだった。じいちゃんは無言のまま、このぼくの手を弱いながらもにぎり返してくれたんだ。その夜おそく、じいちゃんは、ぼくと手をつないだまま天国に旅立った。ぼくは、どうしようもないぐらい悲しくて、じいちゃんの布団ふとんに顔をうずめて声をあげていっぱい泣いたんだ。

しばらくたって、看護師かんごしさんが、じいちゃんの酸素マスクを外そうとちょっと頭を持ち上げてまくらを外したときだった。

「あらっ……。」

じいちゃんのまくらの下にあったのは、しわくちやののしぶくろだった。

「大ちゃんへ。お誕生日たんじょうびおめでとう。いつもお見舞みまひいに来てくれてありがとう。これからもずっと大ちゃんの



ことを見守っているよ。」

ふるえて力のないじいちゃんの字だった。

ぼくの誕生日は、一か月も先だった。

「じいちゃん……。」

じいちゃんの温かな、そして強い思いがぎゅっとぼくの胸一杯におし寄せた。